

人文研アカデミー2020 シンポジウム

抑圧されたものの 痕跡を求めて／辿って

—— 記憶の存在論と歴史の地平 II

ウェビナー
2020

12 / 5

14:00~16:30

発表1:「**「ありえない」出来事の方**
—— **原爆の記憶と性暴力の記憶**」

直野章子 (京都大学)

発表2:「**地を這うものたちの歴史**
—— **断絶の記憶から**」

柿木伸之 (広島市立大学)

討論者: **富山一郎** (同志社大学)、**立木康介** (京都大学)

Venue | **webinar** (人文研HPからお申し込み下さい: <http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>)

主催 | 京都大学人文科学研究所 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

共催 | 科学研究費基盤研究C「集合的記憶論とトラウマ記憶論の接合可能性の探求」(研究代表者: 直野章子)

お問合せ | 京都大学人文科学研究所 総務掛

TEL: 075-753-6902 (月~金 9:00~17:00)

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp>

E-mail: z-academy@zinbun.kyoto-u.ac.jp

抑圧されたものの 痕跡を求めて／辿って

——記憶の存在論と歴史の地平II

記憶とは現在における過去の表象であり、出来事の実在性には関与しない——記憶論にはびこるこの現在主義に対して、記憶の側から異議が申し立てられている。記憶には記憶固有の力と動きがあり、主体に成り代わって過去を証言することもありうる、と。「記憶の存在論」ともいべき課題が、ここにはある。昨今、この課題はもっぱら「トラウマ記憶」として主題化されてきた。

「トラウマ記憶」は、一方で、経験主義の手続きでは認識することのできない出来事に接近する手掛かりを与えてくれる。同時に、記憶された出来事とその帰結のあいだに必ずしも単純な因果関係を打ち立てることができないという「トラウマ記憶」の性質を強調して、出来事が否認されることもある。だからといって、修正主義に対抗するために、「トラウマ記憶」の表現を、出来事の「証拠」として捉えてしまうと、記憶が記憶として存在することの意味に思考を閉ざし、記憶が切り開こうとした知の可能性を否定することになってしまう。

本シンポジウムでは、過去の——しばしば不可視の、それゆえそれを探し出すことから始めねばならない——痕跡として記憶を捉え、「抑圧された者／物たち」の記憶から歴史を切り拓くことの困難と可能性を、哲学、社会学、歴史学、精神分析学の立場から考察していきたい。



直野 章子 (なおのあきこ)

京都大学人文科学研究所准教授。著書に『原爆体験と戦後日本』(岩波書店、2015年)、『被ばくと補償』(平凡社新書、2011年)、『「原爆の絵」と出会う』(岩波ブックレット、2004年)、『ヒロシマ・アメリカ』(溪水社、1997年、平和・協同ジャーナリスト基金奨励賞受賞)など。



柿木 伸之 (かきぎのぶゆき)

広島市立大学国際学部教授。専門は20世紀のドイツ語圏の哲学と美学。著書に『ヴァルター・ベンヤミン——闇を歩く批評』(岩波新書、2019年)、『パット・ゲイツとシマッタ後の世界へ——ヒロシマを想起する思考』(インパクト出版会、2015年)、『ベンヤミンの言語哲学——翻訳としての言語、想起からの歴史』(平凡社、2014年)などがある。訳書に『細川俊夫 音楽を語る——静寂と音響、影と光』(アルテスパブリッシング、2016年)など。



富山 一郎 (とみやまいちろう)

同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授。著書に『始まりの知』(法政大学出版局、2018年)、『流着の思想』(インパクト出版会、2013年)、『暴力の予感』(岩波書店、2002年)、『戦場の記憶』(日本経済評論社、1995年)、『近代日本と「沖縄人」』(日本経済評論社、1990年)など。



立木 康介 (ついきこうすけ)

京都大学人文科学研究所教授。著書に『女は不死である——ラカンと女たちの反哲学』(河出書房新社、近刊)、『狂気の愛、狂女への愛、狂気のなかの愛』(水声社、2016年)、『露出せよ、と現代文明は言う』(河出書房新社、2013年)、『精神分析と現実界』(人文書院、2007年)など。